国際化TF　定例会議

【日時】9月23日　18:00〜

【場所】3331ArtsChiyoda B111

【参加者】松永、薮田、木村、山代、永井、鈴木、国重、梅岡（敬称略）

事務局：中安

■プレゼンテーション「持続的森林経営に向けて」

プレゼンテーター：中島大輔

青梅市出身

国士舘大学工学部土木工学科卒

平成25年林業開始

・発表内容

①森林経営について

②第３者への情報発信について

③まとめ

林業グループコンクール発表資料

・青梅地域

都心から電車で一時間

森林率が63%程度（東京36%)

山を持っているといっても小さな範囲が分散している

・森林経営について

重機を運転して杉林を伐採

土を均して道をつくる（幅2.5m、高さ1.4m程度の道をつくっていく）

土留めに丸太を使用

重機を運転できたら現役の時間が長くなる

伐採した樹を虫が食べないように冬に伐る。

夏は道をつくる。

自伐型林業

基本は自分でとって搬出

小規模機会で低コスト

間伐・卓抜をメインに

・第３者への情報発信について

地元の木を使ってツリーハウスや遊具をつくる活動

・まとめ

木材がどの森から来ているのか分かるというのが重要なのでは

→１つのカフェの椅子がどの森から来ているかの動画

木の裾野を広げる活動グループ「home」

・林業グループコンクール

NPO法人 青梅りんけん 青梅林業研究グループ

1995年発足

青梅ができる林業についてもう一度考える。

主な活動

企業の森支援事業

林業体験の支援

森林体験学習

高校３年性を対象に林業インターンシップ

炭焼き体験

育成講座により採った竹を使って炭焼き

森林ボランティア育成講座

一期２年間で12回の育成講座

青梅市と杉並区の合同で主催

一期につき計30名

修了生 １７２名

多摩産材

大量に伐採すると、禿げ山、大洪水、土砂崩れ、持続的経営の困難などの問題が起きる

東京オリンピックでの使用も検討中

→災害を起こさないために、間伐材を使用していきたい。

・質疑応答

Q.東京では間伐と皆伐どちらが多い？

A.間伐面積・・・皆伐面積の３２倍

材積・・・間伐材1560m3、皆伐材23570m3

供給量を需要に追いつかせるために、皆伐材を使用

皆伐材のほうが効率がよい

中島さんは年間150m3の木材を輸出（平均価格・・・約１万/m3）

次の世帯に遺す

自伐型は輸出するための形

中島さんの地域は江戸時代に禿げ山になって水害が起きる

→第二次世界大戦で禿げ山→造林

需要はあるが、製材所などのルートが消えてしまっている。

→効率を挙げるために皆伐

鹿による獣害

奈良の吉野では平均の約3倍の１ヘクタール一万本を植えて競争させるので、芯が詰まっている。最終的に400本になる。

芯が詰まった丈夫な樹が必要なのか？

→神社・仏閣などに使用

Q.中島さんの父が亡くなり、一人になってもやるか？

A.一人だと事故に対して対処ができないので、難しい

Q.河川は張らないのか？

A.技術的にも人手的にも難しい。

Q.何人くらいがいい？

A.３人くらいが効率がいいと思う。

自分で山を所有していない方々に対する山の貸し出しができるようにならないと、外から新しい人が入ってこない（森林バンクを機能させる必要）

林業講座は人気（サラリーマン、脱サラが多い）なので、その受け皿がつくれれば・・・

■青梅市の林業と中心市街地

プレゼンテーター：青梅市中心市街地活性化協議会 青梅市TM 國廣純子

・青梅駅周辺エリア

古い市場の場所の権利が土着した市場

東（都心側）に商業エリアが集中して、商業エリアから外れてしまった場所

まちの空間から活性化させるしか希望が見えていない状態

織物の産地であった。

住吉神社の祭りでは毎年15万人の観光客が

隣の河辺エリア・・・商業集積地

第一機中心市街地活性化エリア（ 90ha)＝つなげたい箱物の範囲

空き店舗が多い（駅前で30店舗前後）

商店主60代以上の割合・・・市街地合計55%

青梅における市街地不動産物件の課題

住宅と店舗が併用（貸店舗にしづらい）

土地建物の権利関係（合意をとりにくい）

需要物件と供給物件のギャップ（数、規模、費用等）

→ギャップを埋めるためにコーディネーター

→2016年 アキテンポ不動産開設

受付がギャラリー風

見学会でまとめて物件を内覧→オーナーの負担を減らす

個別相談でまちの活性化に寄与しそうな人と契約する

事業効果

20件に絞って集中交渉→6件賃貸からスタート

見学参加者50名

市内57%、市街43%、飲食39%、物販21%、工房18%

物件申し込み件数８件（うち5件が成就）

不動産の流動化を押し進める公共事業と位置づけ

残った問題点

自主改修費用の準備額があまり高くない（50~300万円）

個性的な物件より借りやすい物件に申し込みが集中

→借りやすいようにこちらで改修していく必要がある

青梅はリノベーション物件が多い

織物工場をレストランに

レンタルカフェ（一日でシェフが変わる）

中島さん提供の木材による多目的スペース

今後青梅中心市街地でできること

地元材リノベーション相談窓口設置

公共施設の建て替え・集約

空き店舗対策事業

公園総合的改修計画

←これらのことに地元材の使用の呼びかけ

おうめマルシェ

スーパーマーケットの代替事業

空き店舗の担い手を試す意味も

薪を市場に出す（薪ストープの燃料）

林業者育成講座や森林保全イベントなどの情報発信

外に発信すると内側で気づくことも多い

空き店舗のオーナー開拓の手法を森林バンクに活かせないか

目視リストアップ

→オーナーにコンタクト

→専門家とともに訪問とヒアリング

・縮小社会へ向けたプロジェクトの鉄則

あるものを活かして最小限投資

中規模市場を作る（大量生産のパラドックスに陥らない）

そこにしかないものを強化（体験、リアルタイム感、活動の組み合わせ）

→まちの多様性を維持し、可視化し続ける

江戸時代の住宅需要増から樹木生産が隆盛、青梅街道そのものは石灰石の運搬産業用道路であった。

・質疑応答

松永

西粟倉村に行ったが、薪ストーブ暖房など森林資源の活用、森の学校で商品開発して、間伐材利用。その根幹には100年の森構想がある。

岡山の森林組合はほとんどが統合されており、機材・人材の運用が大規模な範囲でできる。環境共生の住宅という特徴化。総合的な連携を行っている。

鳥取の**智頭町**では腐ったパンという新しい事業

徳島の神山町

ネットワーク化（他人と手を組む）ということは非常に重要

青梅の人口は13万人

青梅は東まで廃墟になっていくのは

バスク地方

山の地域で林業が盛ん

大規模になった協同組合が、潰れてしまったが、皆元気だった。

Q.日本の限界集落はなぜ悲観的なのか

A.青梅は東芝から自立しなければいけない企業が増えてきて、世界的にも誇れる技術をもつ企業が増えてきている。

個別のベンチャーを生み出せるところまで持っていきたい。

次回TFは10月25日(火）